

「複合施設」の問題点と可能性。 埼玉・志木小学校の議論に学ぶ。

誰のための「複合施設」か

県内のある学校が、授業時間中の特別教室を地域のサークル活動に貸し出したことがある。

ほどなく、職員室にクレームが届いた。

「音楽の授業の音がうるさい。静かにしてくれ！」

これは、実際にあった話だ。

いま、放課後や休日に学校の施設を開放したり、学校の「余裕教室」を社会教育施設などに転用するケースも増えている。

だが、学校はあくまで「子どもたちのための教育の場」だ。都合の良い「貸し室」ではない。このことが忘れられれば、前述のような本末転倒が起きる。

新築に際して最初から「複合施設」として建設される場合もある。ある市では、市長の発案で高齢者施設と小学校との「複合施設」が作られた。「お年寄りと子どもたちのふれあいが深まる」というのが謳い文句だった。

だが、両者が自由に行き来できる設計だったため、ほどなく子どもたちに老人性結核が蔓延し、この施設は閉鎖に追い込まれた

繰り返すが、学校はまず第一に「子どもたちのための教育の場」だ。「学校開放」や「複合化」についても、それが「子どもたちにとってどんな意味を持つのか」について、十分に検討されなければならない。

では、それはどんな姿であるべきなのだろう。

学校と図書館・公民館の複合施設

埼玉県志木市には、小学校と図書館、公民館が一体となった複合施設がある。

それが志木市立志木小学校と、隣接する「いろは遊学図書館」「いろは遊学館（公民館）」だ。

市街地に建つ施設は、一見するとツインビルのようなだ。

小学校の入る「教室棟」と図書館や公民館の「生涯学習棟」に分かれていが、ふたつの棟は渡り廊下やオープンス



▲志木市の複合施設

ベースでつながり、相互に交流ができる。

小学校の子どもたちは「いろは遊学図書館」の豊富な蔵書を自由に使える。図書館の司書さんも、子どもたちのたいせつな「図書の先生」だ。

図書館にとっても、利点は少なくない。

志木小学校の子どもたちは本が大好きになった。いろは遊学図書館の児童書の貸し出し数は、市内でもっとも規模の大きい総合図書館をはるかに上回るとい



図書館は学校とつながる

である「いろは遊学館」も隣接する。

学校と公民館との連携は、実際には行事やイベントへの参加にとどまるケースが少なくない。

だが志木小学校では、公民館の成人学級の方たちが社会人講師として年間4～5回の授業を受け持つ。

子どもたちと常に隣り合っている地域の人たちだから、子どもたちの課題もよく理解している。

「いじめ」や「差別」にかかわる人権教育は大切な課題だ。だが重いテーマだけに、一般の学校では適切な講師を探すことは大変だ。

その点、公民館は講演会などを開催してきた豊富な経験と人脈を持つ。志木小学校はこの蓄積を利用できるため、外部講師の授業はとても充実したものになる。施設面でも、お互いにメリットがある。

公民館の休館日である月曜日には、学校は公民館の集会室や調理室などを自由に使える。一方、放課後や休日には学校の施設が公民館施設として開放される。

夏休み中の1ヶ月近く、志木小学校のプールは「市民プール」に早変わりする。もちろん管理は公民館だ。学校側が特に人の配置をする必要はない。

もちろん、問題もある。学校と施設との連絡調整は思いのほか大変なようだ。異動してくる教職員も、最初は戸惑いが大きいという。

だが、志木小学校の場合はそれを上回る利点を持っていると言えるだろう。

「学校の中に町をつくろう」

志木小学校は、創設以来130年の歴史のある伝統校だ。10年ほど前に校舎の改築が計画されたとき、近隣の図書館、公民館との複合施設の構想が生まれた。

「地域に根ざした学校をつくるには、学校の中に町をつくれればいい。地域とふれあうことで、子どもたちはたくさんのかんことを学ぶことができる」

当時の校長先生の、そんな理想が始まりだった。

だが、反対が噴出した。

「そんな必要があるのか」

「子どもたちの安全はどうするのだ」

ちょうどその頃起きたのが、おおぜいの児童が殺傷されたあの池田小学校事件だった。心配した保護者の間では、反対の署名運動まで始まったという。

だが、志木小学校ではけっして「トップダウン」の手法はとらなかった。学校関係者や保護者、地域の人たちで検討委員会がつくれ、さまざまな立場から論議が重ねられた。

すると、次第に構想に対する理解が広まっていった。学校が開校するころには、かつて反対の急先鋒だった保護者が、いちばんの協力者になっていたという。

「開かれた」と「安全」の両立

私は先日、志木小学校を訪ねた。

学校のコンセプトは「開かれた学校」。大きなガラス窓の多い建物は、とても開放的だ。

でも、気づいたことがある。さりげない形だが、しっかりと厳重な防犯対策がとられていたのだ。

エントランスのすぐ脇には、ガラス張りの公民館事務所がある。施設に誰が入ってくるか、事務所から一目でわかるようになっている。

死角になりやすい場所には防犯カメラが据え付けられ、職員室のモニターでチェックされている。

教職員は皆、いつもPHSを所持している。何かあれば、ただちに連絡をとりあい、駆けつけるためだ。

入口や動線の分離は当然である。学校の昇降口にはガードマンも常駐する。

複合施設の論議にあたって保護者の心配が集中したのは「児童の安全」だった。

池田小学校事件が「例外中の例外」であれば、心配も杞憂というものだろう。だが警察庁の統計では、2010年に起きた学校への侵入事件は3千件近い。その大半は窃盗だが、児童・生徒が危害を加えられる事件も毎年のように起きている。

「開かれた学校」という理念の一方で、「安全」の確保もおろそかにはできない。

「開く」と「安全」の両立。志木小学校はそのひと

つのモデルケースかもしれない。

開校以来、志木小学校への侵入事件は一件も起きていないという。

「学校は地域文化の発信拠点」

私はこれまで、いくつかの複合施設を訪ねてきた。

複合化が教育的な効果をもっとも発揮する相手は、やはり図書館かもしれない。

川崎市の柿生小学校も、麻生図書館分館との複合施設だ。施設は入口が明確に分離されているが、内部では自由に行き来ができる。



▲麻尾図書館分館

柿生小学校でも、子どもたちがたくさん本を読むようになり、休日には親子で図書館を利用する姿も見られるようになったという。

公民館との複合施設の場合は、「生涯学習」についての理念がカギかもしれない。

新潟県の聖籠（せいろう）中学校は、その一画に生涯学習の拠点「町民交流ゾーン」が設けられている。

ふたつの町が合併して生まれた聖籠町にとって、聖籠中学校はその統合のシンボルだ。

もともと漁師町の「浜」と農村部の「在」とは、折り合いが良くなかったという。



▲聖籠中学校

だが中学校が統合されたことで、「浜」と「在」の子どもたちは共に学ぶ仲間になった。ならば、大人たちも文化活動を共に担うことで「ひとつの町」をめざそう。それが複合施設の理念となった。

建設にあたっては、町をあげた論議が行われた。その論議は「学校という“まち”が創る学び」（ぎょうせい）という一冊の本になったほどだ。

志木市の場合も聖籠町の場合も、複合施設は学校・保護者・地域の十分な話し合いから生まれた。

その労力ははかりしれない。だが「話し合い」があるからこそ、「なぜ・誰のための複合施設か」の理念が共有される。「安全」も確保される。

さて、引き比べてどうだろう。藤沢市の「学校施設有効活用」方針に、何が欠けていたのか。

私たちは、けっして複合施設そのものを否定してきたわけではない。経過の不透明さや安全性、「子どもたちのため」という視点の不在を批判してきたのだ。

そう遠くない将来、藤沢でも人口急増期に建てられた校舎が一斉に耐用期限を迎える。市の財政状況を考えれば、特に市街地の学校については複合施設の構想も俎上にのぼるだろう。

そのときには、「誰のための施設か」という視点を中心に、透明で開かれた論議を進めたい。